人文研アカデミー2017
連続レクチャー上映会

ロシア革命百周年記念映画祭

映像に刻まれたロシア革命

京都文化博物館3階フィルムシアター

2017年 11月23日(木)〜26日(日)

入場料｜一般500円 大学生400円 高校生以下無料（各回入替制）

主催｜京都大学人文科学研究所
共催｜京都文化博物館
国際交流基金
協力｜アテネ・フランセ文化センター
京都大学文学部・大学院文学研究科スラブ語学スラブ文学専修
東京大学文学部・大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室
科研費基盤研究（B）
「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」（課題番号16H05657）

JAPANFOUNDATION 国際交流基金
ATHÉNÉE FRANÇAIS CULTURAL CENTER アテネ・フランセ文化センター

Russian Revolution(s) Inscribed/Described in Films

THE MUSEUM OF KYOTO

「革命」は歴史的な、一回的な出来事であるものの、ソヴィエトにとって、記憶化／記録化されねばならないある種の創造神話でもあった。レーニンが「芸術」の中で映画というジャンルを重視したように、プロパガンダやアジテーションのみならず、記憶／記録の共有という点で、当時、最大のマス・メディアとして生成しつつあった映画が果たした役割の大きさはいうまでもない。「歴史的革命」は、映画によって「イメージ」として大規模に共有されながら、「イメージとしての革命」が自律的に生成・発展していくことになるだろう。革命期から雪どけ期までの革命映画を見直すことは、「革命」という出来事や思想、それへの態度を再考する契機を与えると同時に、マスメディアを通した記憶／記録の共有というアクチュアリティのある問題の光を投げかける。

ZINBUNKEN ACADEMY

人文研アカデミー2017　連続レクチャー上映会

ロシア革命百周年記念映画祭 ――映像に刻まれたロシア革命――

上映スケジュール

●開場は各回上映開始時間の30分前　●自由席／満席の場合は立見になる場合がございます。
●上映作品は当日変更になる可能性がございます。●日本語字幕がつく予定です。サイレント映画に伴奏はつきません。

『母』

11月23日（木・祝）

13:30–『母』
Мать
（1926年ソ連／監督：フセヴォロド・プドフキン／モノクロ／サイレント／90分／35mm／アテネ・フランセ文化センター蔵）

飲んだくれの夫は死に、革命運動家の息子は逮捕・投獄される。「母」は息子の釈放を求めて運動家たちと行動を共にしながら革命に目覚めていく。1905年の第一次ロシア革命に捧げられたマクシム・ゴーリキー『母』に基づく作品。脚本はナタン・ザルヒーで、プドフキン作品の多くで脚本を手がけている。

［**上映後レクチャー**］司会：中村唯史
小川佐和子「革命前後のロシア映画、ロシア・ソ連映画の日本受容：京大人文研所蔵山本明資料の紹介」
楯岡求美「ヴラジーミル・ヴィソツキー：歌と演劇と映画」

『26人のコミッサール』

17:00–『干渉戦争』
Интервенция
（1968年ソ連／監督：ゲンナジイ・ポロカ／カラー／トーキー／102分／DVD上映）

白軍の支配下にあり、三国協商による軍隊も残っていた1919年のオデッサでの出来事。主人公ブロツキーは女銀行家のもとで息子の家庭教師をしている。同時に彼はボリシェヴィキの地下活動に携わり、外国人兵士にプロパガンダを行っていた。しかし、女銀行家らの密告によりブロツキーは逮捕されてしまうが…。この作品の特徴はエキセントリックでユニークなコメディであることにある。原作はレフ・スラヴィンの1932年発売の同名の戯曲で、彼は脚本も担当。

11月24日（金）

18:30–『26人のコミッサール』
Двадцать шесть комиссаров
（1933年ソ連／監督：ニコライ・シェンゲラヤ、ステパン・ケヴォルコフ／モノクロ／サイレント／109分／DVD上映）

1918年、内戦期のバクーを舞台に展開される、バクー・コミューン=ソヴィエト人民委員会を襲った苦難を題材にした歴史映画。ボリシェヴィキと社会革命党左派によって構成されたバクー・コミューン=ソヴィエト人民委員会は、その力をアゼルバイジャン全土に広げようとしていたが、いまだコーカサス赤軍は存在せず、外からは、トルコ=ドイツ軍がバクーを狙っており、さらにはイギリスも干渉に参加し、バクーの情勢は不安定であった。国内ではメンシェヴィキと社会革命党右派が優勢となり、ボリシェヴィキの人民委員会は権力を明け渡してバクーからの脱出をはかったが、イギリス軍に捕まってしまう。そして、26人の人民委員（=コミッサール）にもたらされる悲劇。サイレント映画時代末期の、アゼルバイジャン・フィルム製作の名作。

［**上映後レクチャー**］司会：大平陽一
伊藤順二「巨大油田都市への視線」

『十月』

11月25日（土）

13:30–『十月』
Октябрь
（1927年ソ連／監督：セルゲイ・エイゼンシュテイン／モノクロ／サイレント／101分／35mm／アテネ・フランセ文化センター蔵）

レーニンを俳優が演じるかたちで、二月革命から十月革命、ソヴィエト政権樹立までを描いた初めての作品。1927年に催された革命十周年記念祭に向けて製作された。臨時政府首班のケレンスキー、革命に反旗を翻したコルニーロフ将軍なども登場するものの、本作が描き出す出来事の主人公とは、間違いなく「群衆」である。作中の「神々のモンタージュ」のシーンは、映画史上、あまりにも有名。

［**上映後レクチャー**］司会：小川佐和子
大平陽一「映画《十月》における映像言語の試みについて」
八木君人「映画の事実：革命十周年記念の映画」

『十月のレーニン』

17:00–『十月のレーニン』
Ленин в октябре
（1937年ソ連／監督：ミハイル・ロンム／モノクロ／トーキー／105分／35mm／アテネ・フランセ文化センター蔵）

レーニンを中心にすえ、レニングラードにレーニンが戻ってきてから十月革命完遂までを描いた、革命二十周年記念にあわせて製作された作品。エイゼンシテインの『十月』（1927）以降、はじめてレーニンを映画で描いたものでもある。それまでの革命映画に比べてスターリンの存在感が出てきているのも特徴の一つ。また、この作品の続編として、同監督による『1918年のレーニン』（1939）がある。

11月26日（日）

13:30–『ロマノフ王朝の崩壊』
Падение династии Романовых
（1927年ソ連／監督：エスフィリ・シューブ監督／モノクロ／サイレント／62分／DVD上映）

エイゼンシテインやジガ・ヴェルトフと交流のあったシューブ監督は、過去に撮られた記録映像を編集し、字幕を加えることで、1917年の二月革命とロマノフ王朝の終焉、ボリシェヴィキの台頭を歴史的必然として描き出してみせた。この『ロマノフ王朝の崩壊』で一躍、新世代のドキュメンタリー映画の旗手として高い評価を確立したシューブは、続けて、十月革命直前からボリシェヴィキ政権成立後を同じ手法で描いた『偉大なる道』を製作している。

［**上映後レクチャー**］コメンテーター：八木君人　司会：小川佐和子
中村唯史「《ロシア・アヴァンギャルド》と《社会主義リアリズム》のあいだ」
マクシム・パヴロフ「ロシア革命と映画（仮）」

『チャパーエフ』

17:00–『チャパーエフ』
Чапаев
（1934年ソ連／監督：ワシリエフ兄弟（ゲオルギー&セルゲイ）監督／モノクロ／トーキー／93分／35mm／アテネ・フランセ文化センター蔵）

革命に続く内戦期、赤軍25師団を率い、白軍に数々の勝利をおさめた貧農出身の司令官チャパーエフ。勇猛果敢だが粗暴で政治意識と組織力に欠ける彼とその部下のボリシェヴィキ化のために派遣された政治委員フールマノフは、衝突しながらも次第にチャパーエフたちと深い友情で結ばれていく。実話に基づくフールマノフの小説『チャパーエフ』（1923）をワシリエフ兄弟が映画化して、当時、観客から絶大な人気を博した。この時期を代表するソヴィエト映画。

講師プロフィール

マクシム・パヴロフ（Павлов Максим Игоревич）
国際的に有名な映画評論家ナウム・クレイマンのもとロシア国立映画博物館副館長を務める。2016年以降トレチャコフ美術館の映像像部門の立ち上げから任され、美術と映像をつなぐレクチャーシリーズなどを行っている。国際エイゼンシュテイン・センター財団キュレーターも兼任。

伊藤順二（いとう・じゅんじ）
京都大学人文科学研究所准教授。近代コーカサス史をジョージア（グルジア）中心に研究。グルジアはスターリンの生地として興味を持ちはじめたのですが、深夜にTVでやってた『不思議惑星キン・ザ・ザ』が忘れられません。

大平陽一（おおひら・よういち）
天理大学教授。時代に取り残されたかのように、エイゼンシュテインだとか言語学者のヤコブソンのような近年評価がガタ落ちの人物から離れられずにいるのですが、ほんとうに詳しいのはサッカーです。

小川佐和子（おがわ・さわこ）
京都大学人文科学研究所助教。専門は映画史、大衆喜歌劇論。ロシア革命前のブルジョワ映画と革命後にフランスやドイツへ亡命した映画人たちの前衛映画に惹かれていますが、ほんとうに好きなのはオペレッタです。

楯岡求美（たておか・くみ）
東京大学准教授。専門はロシア演劇、ロシア・ソ連文化論。ソ連映画のナチュラルな演技を見ると、心理をベースとする「スタニスラフスキー・システム」は演劇より映画に適していると思います。最近はサイレント映画や実験的アニメに興味があります。

中村唯史（なかむら・ただし）
京都大学文学研究科教授。専門はロシア文学・ソ連文化論。DVDも何もない昔、ソ連映画にはまって映画館通いをしていました。社会主義リアリズムをB級映画として観た時の過剰さが大好きです。でも日本の戯曲とマンガも好きです。

八木君人（やぎ・なおと）
早稲田大学専任講師。専門はロシア・フォルマリズム、ロシア・アヴァンギャルド。あるとき、なぜか革命十周年記念の映画について調べ、そのことだけは妙に詳しくなった。最近は、ドキュメンタリー映画にしか食指が動かなくなってしまったのが悩みの種。

［交通案内］
■地下鉄「烏丸御池駅」下車、5番出口から三条通を東へ徒歩約3分
■阪急「烏丸駅」下車、16番出口から高倉通を北へ徒歩約7分
■京阪「三条駅」下車、6番出口から三条通を西へ徒歩約15分
■ＪＲ・近鉄「京都駅」から地下鉄へ
■市バス「堺町御池」下車、徒歩約2分

THE MUSEUM OF KYOTO
京都文化博物館
〒604-8183　京都市中京区三条高倉
TEL.075-222-0888　FAX.075-222-0889
URL http://www.bunpaku.or.jp